
Brilliant World

葛城 純

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Brilliant World

【Nコード】

N0701L

【作者名】

葛城 純

【あらすじ】

いつものバイト帰りにトラックと接触事故を起こす沢村綾。
目を開けたら、病院かと思いきや、そこは道の果てが見えない大草原でした。事故により異世界にトリップ。そこでは紋章の有無で階級を分けていて、何よりも身分を重んじる世界だった。高校のエンブレムが何故か騎士の紋章と同じだという理由で、王族に保護されることに。そこで出会った王子が、何とも鼻持ちならない高慢な王子様で……。異世界トリップラブファンタジー！。

序章

選ぶことは許されなかった。

もとより選択権は無く、ただ受け入れることのみが許される全てだった。

存在するだけで疎まれることがあるなんて知るはずがない。

体に流れる血が憎いのだ、^と思い知らされて踏み躪られるだけだった。

「はあ……？」

確実に自分は死んだと思った。

バイトが終わり、買い物をして歩道を歩いていた綾に、猛烈なスピードでトラックが突っ込んで来たのだ。

体に激しい衝撃を受けて、意識を失いながらも、冷静に死ぬのだと思ったはずなのだが。

綾の目の前に広がるのは、死後の世界ではなく、病院でもない。道の果てが見えないただっ広い草原だった。

ここは定番の行動に出てみることにして、綾は自分の頬を強くつねった。

「……痛い……。夢オチとか今時流行らないって。漫画じゃないんだからやめてよ。冗談キツイ」

夢から覚めると言わんばかりに、今度は自分の頭を強く叩いてみる。

加減を誤り前のめりに地面に倒れてしまい、綾はそのまま地面に埋まりたい気分で一杯になった。

変わらない現実には、綾は誰彼構わず喚きちらして八つ当たりをしたくなったが、生憎言語を話す人間は自分一人。

「本当に冗談じゃないよ……」

大草原にただ一人。

その嘆きを受けとめるのは風に揺れている木々や草花だけだった。

出会いは理不尽

まずは確認しなければ。

綾は両手で体のあちこちを触って、その後腰を伸ばし、柔軟体操を行う。軽く上に伸び、深呼吸。

どうやら怪我はないようだ。頭も痛くないし、気分も悪くない。そうになると、事故の衝撃が謎になるが、そこは考えても解明のしようがないので放置することにした。

「怪我はないのはラッキー。買い物はしたところだったから、数日は食糧に困らない。携帯は……圏外だからあてにならない。今することは、現状位置の把握。人を捜すこと。よし、動くぞ」

ここでこうしていても状況は変わらない。もしかしたら、事故で死んだかとも思われて、どこかに放置された可能性も捨てきれない。幸い怪我もないし、体はすこぶる快調だ。

とにかく動かなければならない。今はひたすら歩こう。

綾は立ち上がり歩き始めた。

納得はできなくても誰も助けてはくれない。

たとえ、どんな事が起こっても、選択を決定し進むのは、自分しかないのだから。

出会いは理不尽*2

腰の高さまである草を掻き分けながら前に進む。歩けども歩けども原っぱは続いている。

「ちよつと……、本当にここどこなのよ……。建物すら見えないし」

かれこれ数時間は歩いているが、建物はおろか道も見えない。

途中休憩も挟みつつ移動するが、どこまで行っても変わらない景色にため息しか出てこない。

しかもバイト帰りの事故の時は夜だったはずだ。目を開けたら、夜明けのように空が白み始めていた。

そして今太陽は頭の上だ。ちなみに携帯の時刻は真夜中。本来なら、暖かな布団の中で眠りにについている時刻である。

多少イラツとしながら、綾はもう一度時刻を確かめる。そろそろ体力も尽きそうだ。

眠るうにも外だし、何があるか分からないので、迂闊にその辺で寝転ぶわけにもいかない。とりあえず長い草を倒して、再びため息を吐きながらその場に座った。

鞆からカロリーメイトを取出し、もそもそと食べる。すぐに食べ終えて、鞆からペットボトルを取り出して、水を二口飲む。

それらを鞆にしまい、体を草の上に倒した。

学校に行き勉学に励み、バイトに出て勤労に従事する、日常生活

のために買い物をして、帰る間に事故。やばい死んだと思いきや、気が付いたら大草原。神様、何のイジメですか。

無事に帰ったら、寺か神社に行つて、盛大に文句を言いに行こう。綾は心の中で深く誓い、軽い勢いをつけて立ち上がった。

再び歩き始めて、更に数時間。ようやく前方に森が見えた。

「……………森かよー!!」

叫びたくもなる。人でもなく建物でもなく道路でもなく、森。しかも鬱蒼とした深い大きな森。どうしると。

さすがに泣きたくなつたが、どうしようもないのでとにかく歩く。

ひたすら歩いて森に着き、そこで体力も尽きて、大きな木の根元に腰を下ろす。太い木にもたれ、荷物を脇に置いた。

全身に深い疲れが蓄まっているのが分かる。

抵抗できないほどの疲れと眠気に、目を閉じて体の力を抜いた。ちよつとだけなら大丈夫だろう。意識が眠りの底に沈み始めた。

「……………大地……………」

もう一人の自分の分身、双子の弟の名前を口にして、綾は束の間の休息に身を任せた。

出会いは理不尽*3

「うう……」

目を覚ますとまだ昼過ぎのようで、そんなに時間は経っていないようだった。

少しは疲れが取れているようだが、木の根元でうたた寝したせいか体が痛い。

立ち上がって体を伸ばし、荷物を背負った。

ここからどう進むか。このまま進んでも森の奥に入り込むだけで、人里に近づくどころか、逆に遠ざかることにはならないだろうか。背後を見ても、今まで見ていたとにかくだっ広い大草原があるのみで、引き返しても何にもならないことを示している。

ならば前に進むか、と自棄になりながら決めた。

ただ真っすぐに進んでも自滅するだけなので、鞆からタオルを取り出して、鋏で縦長に細く切っていく。これで枝などに結べば、道に迷うことなく探索はできるだろう。

こういう時に役立つとはね、綾は苦笑した。

『お前の鞆は無駄に大きい上に、重たすぎる』

常々大地に小言をくらっていたのだ。

こんな状況であまり役立って欲しくないが、入れていてよかったと再び苦笑した。

入り口付近にタオルの切れ端を結び、奥に入っていく。ある程度進んだら、また切れ端を結ぶ……という行動を繰り返すが、ますます奥に入り込む感じがする。このまま進めば出れないんじゃない？ と綾は不安になってきた。

何よりここに熊はいないのだろうか。鹿ならまだしも、熊や狼に猿とか鷹とか止めてほしい。襲われたら確実に死ぬ。冷や汗を掻きながらも、歩みを止めずに前に進んだ。

しばらくまた前に進むと、茂みの奥の方で何やらがさがさと動いている。

綾はびくつと体を震わせ、恐る恐る茂みに何がいるか確かめようとして動いた時だった。

空気を切り裂くような音が鳴り、綾の頬を何かが掠め、傍の大きな木に刺さった。

「……………！？」

木に刺さったそれは長い矢だった。放った勢いの強さを示すように、大きく揺れている。

恐怖と驚きのままに、綾はその場に座り込み、矢が擦った頬に手を当てた。

「……………あ……………」

指がぬるりと滑り、指から血が流れていた。どうやら軽く掠めたはずなのに、案外強く掠めていたようだ。思

っていたより多い出血量に、新たな動揺が加わる。

早くこの場から離れ、安全な位置を確保する必要があるのに、恐怖で固まった綾の体は言うことを聞いてくれない。

その時森の奥の方から、何かが走ってくるような音が聞こえてきた。微かな話し声まで聞こえてくる。

極限まで恐怖が体を支配した時、ようやく綾の体が動いてくれた。何とか体を立ち上がらせ、全力でその場から走りだした。

何でこんな目に遭わなければならないのか。

「勘弁してよ、神様……！」

綾は空にそう毒づいた。

出会いは理不尽*4

慌てて走りだしても、勿論走ってくる音の方が素早いらしく、どんどん音が近づいてくる。

ますます焦り、闇雲に獣道を全速で走る。足場の悪い道とも言えない地面のせいで、思うようにスピードが出ない。

音が間近に迫ったような気がして、一瞬背後を見て、また走りだそうとした時だった。

「あつ……！」

下を見ないで走ったせいで、思い切り歪な木の根に足を引っ付けた。

ものの見事に綾の体は宙を飛び、大きな窪みに背中から落ちた。中途半端に受け身を取ろうとしたのが原因なのか、綾は背中を強打した。痛さのあまり声が出ない。

息詰まるような痛みに、目からぼろぼろ涙が零れる。それでも立ち上がろうとするが、うまい具合に体が窪みにはまってしまっていて、尚且つ完全に両膝が浮き上がっていて藻掻くことがままならない。

「やだ……！ んうーんいー！！ 何これ抜けないし！ もー！！ ちよつともう本当真剣勘弁してよー！」

綾は半泣きで叫んだ。痛みと混乱で何を言ってるのか分からない

ほどにパニックに陥った。

そして足音は側まで追い付いてきて、すぐ側の茂みに気配が漂っている。

胸の中で激しく心臓が高鳴る。もう駄目だ、殺されてしまう……

！ 綾は完全に覚悟した。

ただで殺されてしまうつもりはない。せめて、一撃でも見舞ってから死んでやると心を定めた。

出会いは理不尽*5

目の前が薄ら陰った。

「……ファージャにしては大きいな……」
「はあ……？」

恐る恐る見上げてみると、金髪の男が綾を不思議そうに見下ろしていた。

直ぐ様攻撃されるのかと思いきや、不躰な視線で全身を隈無く観察されている。すぐに殺されることは免れたみたいだが、この視線にずっと耐えられるほど、神経が太いわけでもない。居心地の悪い思いをしながら、現状を打破すべく、綾は再びじたばたと藻掻きだした。

「うわっ……」

金髪の男は、急に綾の両脇に腕を差し入れて、軽々と綾を目の高さまで人形のように持ち上げた。

突然のことに呆気にとられることしかできない。

とりあえず綾は、目の前の金髪の男をガン見した。やられたらやり返せ、それが綾のルールだ。

日本人には見えない欧米特有の金髪。そして碧眼。これは俗に言う王子的外見ですか。

綾は目を見つめながらも観察を続けた。ガラス玉のような瞳を見ながら、取り出したらガラスじゃないのかな、思わず目に指を入れなくなる衝動を堪えた。

髪は短めで、ふわふわとしている。ますます王子さまだ。しかもこの持ち上げられた高さを考えると身長は高い。

マントにブーツ。肩には弓矢。腰には刀……？ いや剣が一振り。RPGでよく見られるような、旅人の豪華版な服装だ。

所謂王子さま……？ な男を目の前に、綾はますます戸惑った。現代ではまず見かけないからだ。美形なのはまず脇に置いといて、服装が納得できない。何かが引つ掛かるが、今は何が引つ掛かっているのか考えている暇はない。

「……」

「……」

お互いにお互いを観察している状況が、何故か酷く滑稽に感じた。

「あの……そろそろ下ろしてもらえませんか？ 起こしてもらえたのは感謝しますけど」

とにかく綾は、王子っぽい男にそう提案した。

出会いは理不尽*6

口を開こうとする王子もどきの男を遮るように、少し控えめに後ろに下がっていた二人の男のうち一人が、やや早口に言葉を発した。

「殿下、捕縛して連行しますよ」

「まあ待て。まだ子どもじゃないか」

「あの、ちよつと」

子ども扱いされた綾は、そこで一言物申し上げたかったが、王子とそのお付き人は聞く耳を持つてくれなかった。

「怪しい者には違いありません」

「うーん……」

「悩むほどの事ですか」

いや、まず人を射たことに驚愕し、そして謝罪してほしいんですけど、綾はそう突っ込みたかったが、王子は何やら違うことを考えているらしい。

「いや、見たことのない服装をしているな、と思って」

「ちよつと人の話を聞いてください」

再び綾は会話に割り込んでみるが、まるで無視。もう少し、もう少しだけ我慢をすることを理性に強いた。

「怪しすぎます」

「分かってないなシリア。庶民の流行かもしれないよ？」

「だから人の話を聞いて……！」

「また殿下はそういうめずらしい物に興味を覚えただけでしょ？」

「見たことのない髪の色に服装。気になるだろう」

「殿下が興味を覚える程の物ではありません。怪しい者を近付ける必要ありません」

「窪みにはまる間抜けがいるか？ 見事にこうもはまる間抜けは

「そうそう居ないだろう」

「確かに、こんな間抜けが一味とは思えませんがね。」
「そうだろう？」

どこまで綾の理性が保つか試されているのだろうか。間抜け間抜けとどこまで人を馬鹿にしているのか。怒りで綾の手が震えてきた。

だが、綾はまだ怒りを押さえた。万が一、万が一だ。何らかの誤解もあるのかもしれない。人は誤解をする生きものだ。

綾は理性を総動員し、拳を握り締め耐えた。綾の話を聞いてもらわなければ。そして何より、下ろせ。

「だから本当に貴方たちいい加減に話を」

「ヒーリア、この黒い目は本当に綺麗じゃないか」 「綺麗です

けど、何か気味悪くないですか」

「そうか？ 神秘的じゃないか」

「殿下……！ 駄目ですよ！ それにその紋章は！」

「いい加減に人の話を聞いて、私を下に下ろせー！！」

散々無視された綾の理性は、最後まで保ちはしなかった。

勢いの乗った右足は、そのまま上に上がり、全身の力と怒りを込めた渾身の蹴りは、王子とやらの顎に華麗に決まった。

出会いは理不尽*7

「……すみませんでしたっ……」

何故か謝る状況になった綾は、多少不貞腐れながら謝った。

確かにあの男は、蹴られた後よろけて後頭部を木にぶつけた上に、蹴られた時に舌を嚙んだらしく呻いていたが。

どう考えても、突然人に向かって矢を放ち、あまつさえ人を物のように持ち上げ、綾を無視し続けた相手が悪いはずなのに。

お付きの二人に睨まれながら、綾は心の中で殿下とやらに毒づいた。

「……真に僭越ながら申し上げたいんですけど、人様に向かって突然矢を射るそちら様の常識を疑いたいんですけど。謝罪の一言もないんですか」

嫌味を盛大に込めて、へり下った言い方で文句を付けてみた。最もなはずの綾の文句は黙殺され、謝罪ではなく逆に問いただされた。

「何者だ」

「は？」

「何者だと聞いている」

またしてもぶちつと綾の理性が糸が切れた。

「それが人に名前を聞く態度？ 人に名前を尋ねる前に、自分の名前を名乗るのがマナーでしょ？ それに興味深そうに人の顔を観察してる殿下とやらが、まず謝罪をして名乗るのが筋ってもんじゃないの？ どの誰だか知らないけど、人に矢を射てはいけないうという常識もご存知ないんですか、あなた方の殿下とやはら。随分なご身分ですね、顔を洗って出直せば」

限界まで怒りを押さえていたせいか、とうとう言いたかったことを全て言ってしまった。

いや、私は悪くないし！ 蹴ってしまったことは謝ったし、舌を噛んで後頭部をぶつけてたんごぶできて痛いかもだけど、私だって痛かった。お互い様なはずだ。綾は開き直った。自称王子も謝るべきだ。

お付きの男の目付きが変わる。どうやら綾は言い過ぎたらしい。やばい、殺される？

「……失礼した。私はエンファルコード＝ガーディアと言う。貴方の名前を教えて頂きたい」

「殿下！」

「いい。女性に矢を放つという非道極まりない所業をした上に、女性の顔を傷つけた。深くお詫び申し上げます。そして、名前を教えて頂きたい。できればご身分もお聞かせ願いたい」

金髪碧眼の男に頭を下げられ、謝罪をされて名乗れたのでは、綾も折れざるをえない。

「……アヤ。沢村綾。高校三年」

この理不尽極まりない出会いが、これからの綾の人生を大きく変えることになるなんて、この時の綾は思い付きもしなかった。

番外編『それは温もりに似ている』

その日はこの冬一番の寒さだったことを憶えている。

父さんと母さんが事故で死んでしまった。

お通夜とお葬式が終わり、私たち双子の引取先をどの家にするか、親戚中が揉めに揉めた。傍から見ても顔をしかめる醜態さだったと、心配して付き添いをしてくれた学校の先生が後で教えてくれた。

揉めた理由は父さんと母さんが駈け落ちしたからだ。

母さんの実家はそこそこ大きな財閥らしく、現代の日本にはあるまじき身分差別の激しい家だった。

父さんを含む私たちを見下し、娘を奪った憎い敵と罵られた。

その憎い相手を引き取らなければならない。彼らには到底受け入れがたいらしく、信じられないことに半年ごとに親戚中をたらい回しにされることで話がついた。

今も言い争う大人の声が残っている。だったら、引き取らなければいいのと思うけど、私と双子の弟の大地はまだ小学生で、誰かの世話がないと生きていけない。大地と引き離されることを思えば、我慢するしかなかった。

半年ごとに変わる住所。冷たい空気に冷たい食事。親戚の子どもたちからの苛めも酷くて、酷い時はご飯を抜かれる。

訳の解らないままに全てを奪われて、外に放り出されたようなものだ。

私と大地はいつもご飯を分け合って食べて、寒い時は二人で暖めあった。

痩せて細くなっっていく私たちを見兼ねて、学校の担任の先生が家を訪問して来て、私たちを連れ出して先生の自宅に連れて来た。

先生はとても優しい人で、いつも心配していてくれたのだ。

疲れ果て表情の無くなった私たちを抱きしめ、そして私たちの代わりのように涙を零した。

「何もできない腑甲斐ない大人たちを許してくれ……」

あの卑怯で狡い親戚の連中から私たちを連れ出して、暖かな腕で守ってくれたのは先生なのに、何もできないと泣いてくれた。

「これからもっと辛く厳しい現実が、君たちを容赦なく打ちのめすだろう。心折れるような裏切りや、死にたくなるような仕打ちに泣き叫ぶこともあるかもしれない」

再び先生は、私たちをぎゅっと抱きしめた。

「それでも、生きるんだ」

そして又一つ涙を零した。

「いつか出会ったった一人の誰かのために生きる。その時まで、僕が君たちを愛している」

そう言って微笑んだ先生は、私たちが中学にあがった一年目に病で倒れ死んでしまった。

置いていってしまうことを最後まで悔やんでも、亡くなる寸前まで家族のように愛してくれた先生。

暗く冷たい世の中で、誰よりも私たちに温もりをくれたことを、私はずっとずっと忘れない。

今日私たちは高校生になったよ、先生。

あれからいろいろあったけど、私と大地は元気です。

「綾、急ぐぞ。入学式に遅刻する」

「うん。式終わったら、先生のとこ行こうね。報告しよう」

「そうだな」

雲一つない青空。暖かい日差しを浴びながら、桜の花びらが舞う道を歩いた。春の暖かな日差しは、あの日先生がくれた温もりに似ていた。

現在位置身分不確定。

エンファルコード「ガーディア」。

正真正銘の王子さま。嘘だ、と否定したくても、お付きの従者の様子がそれを許さない。

綾は深くため息を吐いた。

軽い自己紹介がすんだ後、制服のエンブレムを問いただされ、『高校生』の説明を求められた。

その説明をするには、まず綾の世界の定義から話さなければならぬので、適当に学徒のようなものと端折った。

そしてエンブレムは、その学校の象徴的なものとも説明したが、あまり理解は得られなかった。

とにかく今の現在地を知りたいので、綾はエンブレムの説明を強引に終わらせ、矢継ぎ早に質問を重ねた。

「ここは何処で、貴方達は何が目的で此処にいるんですか？」

「割にせっかちな。君の世界の説明もまだなんだけど。……まあ、いいか」

苦笑した王子さまは、そんな様すら整っている。何様だ！ とばかりに綾は睨み付けた。

「この国はガーディアナ王国という。私はこの国の王子だ。この二人は私の護衛の騎士。この森には……まあ狩りに来たつてところだな。さて説明はすんだ。次は君の番だ。女性の身で馬もなしにこの森にただ一人でいる、このことがどんなに奇異に映るか理解して

もらえるだろうか。君は何処から来て、なぜ此処にいる？」最も
な質問に、綾はぐつと詰まった。得体の知れない女を相手に、この
王子の態度は破格の対応に違いないからだ。

「世界の名前で言うなら『地球』。国名で言うところ『日本』。気が
付いたら、此処にいて、物音がしたからとにかく逃げました。どう
して此処にいるのか、逆に説明が欲しいくらいです」

綾はここで一息吐いて、真つすぐに王子の目を見つめて言った。

「ガーディアナ王国という地名を聞いたことなんてありません。
貴方の名前も、この森も記憶にはありません」

だから、異世界トリップなんてネタみたいな状況から解放くださ
い。何度目かの心からのお願いを込めて、綾は王子が否定しないこ
とだけを祈った。

現在位置身分不確定*2

「聞かない国名だな……。ましてや世界に名前があるなどと……さてどうするかな」

あつさりとエンファルコード王子は綾の言葉を否定した。

「殿下」

「何だ」

「もしかして連れ帰るおつもりですか」

「……そのつもりだが」

「お止め下さい。何処の誰だか分からぬ者を連れ帰るなど!」

「ヒーリア。私たちは何の罪も無い女性を傷つけたんだ。心からの謝罪と手当てはするものだ。違うか？」

「ですが!」

「ヒーリア」

「……………御意」

綾の目の前で、綾の処遇が決まっていく。何にせよ、ヒーリアは猛反対で、エンファルコード王子に反論していた。

それはまあ、得体の知れない小娘が現われて、異世界から来たとか抜かし、全く聞いたことの無い地名を言って、且つ奇妙な服装をしていたら、大事な主君に近付けたくないのは解る。こいつは頭弱い? というかイカしてる? とか思うだろう。綾だっと思う。

申し訳ないが綾だっけ引けないのだ。此処に置いていかれると、確実に野垂れ死ぬ。放り出すなら、せめてこの世界の予備知識を付けてからにしてほしい。とにかくここで引き下がったら獣の餌だ。

「えーと、すみません。図々しくて本当に申し訳ないんですけど、せめて人のいる場所まで連れて行ってもらっていいですか。あと、この世界の基盤を教えてください。あ、あとお金貸して下さい。働いて後で必ず返しますから。そして後は自分で何とかします。それで、この顔の傷はチャラってことにして下さい」

エンファルコード王子は、突然べらべらと話した綾を驚いた目で見た後、軽く笑った後答えた。

「それだけではこちらの面目が立たない。暫らくの間の生活は心配することがないよう取り計らうよ」

会話を遮ろうとする従者の二人を制して、王子は綾にそう提案した。

現在位置身分不確定*3

綾としては有り難いが、従者二人の表情がその提案を全否定している。

複雑な気分を察してもらいたいが、いかんせん無理な話だろう。

二人は主君大事だ。

生き延びるために、綾は二人の従者の表情を見なかったことにした。

「有り難うございます。すみませんが、お世話になります」

こうして綾は、王子に連れられて王都に向かうことになった。

王都に着くまでに一週間。王子がそんなに城を離れていいのか……？ とは思ったが、そこはそれ森に来てもらわなければ保護してもらえなかったのだよしとしよう。しかし遠い。

「あれが王都サフィニアだ」

指を指し示す方向に町が見えたが、城など見えない。

「町しかありませんよ？ お城見えないですけど」

「見えている街は城下町だな。その先に城があるんだよ」

「……どんだけ広いですか……」

ガーディアナ王国は山に囲まれた、緑豊かな国だと言う。その中

心に王都があり、山が防壁にもなっていて、資源が豊富な都だそう
だ。何やら難しく説明するのもあれだ、端折るとそんな国だと簡単
に説明された。それでいいのか、王子。

そのまま城に向かうのかと思いきや、王都に着く手前で近くの宿
屋に泊まることになった。

疑問に思う綾に、王子は事前の打ち合わせをすると話した。この
まま綾を城に入れるにはあまりにも危険なのだそうだ。

庶民の小娘に敵意を剥き出しにした奴らが言うことじゃないだろ、
綾は危うく口走りそうになったが、全力で口を開くのを押さえ、や
たら美形な（特に王子）三人を相手に、鍛えぬかれた営業スマイル
で戦闘態勢？ に入った。

美形に負けてなるものか。勝ち取れ生活保護。

現在位置身分不確定*4

「まずはざっとこの世界の説明と、君の身分を決めようと思う。
不満はあるだろうけど、しばらくは我慢してくれ」

宿の一室に落ち着いて、黒髪で茶色の目……ヒーリアがお茶を用意して、赤茶けた髪の青い目……シシリアが茶菓子をテーブルに出し、エンファルコード王子は話を切り出した。

「私たちが住んでいる世界……この世界は紋章によって身分が分かれている。一般には紋章はなく、騎士及び貴族に紋章がある。それとは別に王家には王家の紋章があるんだ」

「ここから先は私が説明しましょう。下から順に、花の紋章、葉の紋章、星、雪と紋章が分かれています。君の服に付いている紋章は、この世界では星の紋章と言われていて、最高位ではないけれど、位の高い紋章なのです」

シシリアが王子の後を引き継いで説明をする。

綾にしてみれば、ただの高校のエンブレムなのだが、この世界ではそれが身分証明にもなるほどの価値があると聞かされると、少々複雑な気分になった。

綾の高校のエンブレムは変わっていて、星を幾つも重ねた形のエンブレムなのだ。まさかこれが異世界と共通しているとは思わないだろう。

「簡単に説明はしたが、紋章についてはこんなところだ。生活については追い追い侍女に説明させる。次に君の身分……」

一口お茶を口に含み、綾にっこりと微笑みを向けた。どこのナンパ師だ。綾は即座に突っ込みそうになったが、話が進まない上に、部下二人に抹殺されることを予想して、言葉を前歯でせき止めた。

現在位置身分不確定*5

「君の身分を決める前に、幾つか問題点があつてね。だから今から言うことを必ず守ってもらいたいんだ」

問題点があるわりには、すごい笑顔なんですけど王子様。綾は心の中でツッコミを入れて、話の先を促した。

まず一つは、綾が異世界から来たこと秘密にする。

もしそれが露見したら、王都が混乱する上に、綾が利用される危険性がある。そして名前。名前はともかく姓が変わっているので、余計なことが発覚する。なので、名乗るときはただの『アヤ』で名乗り、必要性がある場合のみ王家のファミリーネームを名乗ること。

「えーと、王子様質問です」

「なにかな」

「ただの小娘に何か危険なことが起こりようもないと思うので、別にどこから来たとか秘密にする必要性はないかと。あと、単なる一般庶民に仮にでも王族の姓を名乗ることは無理がないですか？」

「異世界から来た娘ということで、利用されないとは限らない。

そして君は庶民では通らないんだよ。どんな理由があろうとも、その星の紋章が有る限り貴族とみなされるんだよ」

「そんな品格ないんですけど」

「君には教育を受けてもらうことになる。せめて君がこの世界で生きていけるようにね」

「……」

綾はどんどん進んでいく話に呆然となった。教育とかおかしい方向に話が進んで行っている。綾はここで暮らしたいわけではない。帰りたいのだ。

「あの、教育とか大変有り難いんですけど、私を今後どうするかほぼ決まってるんですか」

「王宮に住んでもらおうと思ってるけど」

「それって大問題でしょ！？　どこの王族が庶民を王宮に暮らせるんですか！」

「ここにいるけど」

しれっと答える王子に、綾は目眩を起こしそうになった。

駄目だ、この人。話を通じねえ。

現在位置身分不確定*6

このまま流されると、何かしらよくないことが起きる気がする。
綾はそう感じて、咄嗟に提案した。

「王宮に住むことになるなら、何か仕事をください。騎士の紋章
って言うことは軍隊があるんですよね？ 軍の仕事でも何でもやり
ます」

「貴方は女性でしょう？」

呆れた口調でヒーリアが答えた。

「実戦の経験はないですし、さすがに警備とかできません。でも
さすがに雑用とかありますよね？ その類の仕事します。食堂とか
あるなら賄いでもやります」

「何を言っているんですか。さっきも言いましたが、貴方の紋章
は星ですよ？ そんなことさせられる訳がない。ましてや、異世界
の人間に軍の機密に携わる仕事を任せられる訳が」 「まあ、い
いんじゃないか」

「殿下！」

「仕事をしてもらって、王宮の客室に住んで頂こう」

「駄目です！ いけません！」

激しく反対するヒーリアに、綾は複雑な思いで一杯だ。言ってい
ることはよく解る。解るのだが、そこまで怪しい人間じゃないと思
う。彼らにしたら、異世界の人間。つまりは未確認生命体。綾は自
分がエイリアンのような気がしてきた。

存在を否定されることは、自分の世界でも慣れっこだ。血の繋がりでさえ、存在を否定されているというのに。

今の自分が酷く滑稽に思えてきた。

「客人の身分が心苦しいならそれもありだろう。いいじゃないか。軍も助かるし。それに身近に置いたほうが監視もできるだろう?」

王子がヒーリアにそう言って微笑んだ。目礼して引き下がるヒーリアに、何となく腹が立つのは何でだろう。

とりあえずは居場所を確保できるのだから、あえてここで混ぜ返すこともないだろう。

「すみませんが、よろしく願いします。お世話になります」

こうして、綾はこの世界で『客人兼將軍補佐見習い』という、身分を手に入れた。

この先どうなるかなんて解らない、けれどもしばらくはこの人たちに共に行く。そこに潜む感情は今も蓋をして。

閑話：優しさとナンパは紙一重・前編

「じゃあ、今日はこの辺で宿を取ろうか」

王子が笑顔で宣言した。

「まだ日が高いから先に進めますよ？」

「この先は当分宿がないだろう。ここで休んで、次の日からまた進んだ方が効率がいい」

野宿には抵抗ないけど、セレブな方々に野宿をさせるのは確かに忍びない。

その前に切実な問題がある。

「真に申し訳ないんですけど、当然ながら私はこの世界のお金を持っています。すみませんが、後で働いて返しますので宿代諸々貸してください」

「それには及びません。当面の貴方の生活費はこちらが持ちますので、お気になさらずに結構です」

黒髪のヒーリアさんが無表情でそう言った。気に入らないのはしよすがないとして、せめてもう少し愛想良くしてはもらえないだろうか。大人気ない。

そう思いながらも、王子一行に付いていくと、しばらくして町の中心ほどにある宿に着いた。

……宿じゃないよ……超豪華ホテル規模じゃないか！

「……あの……、宿泊費超高そうなんですけど……」

「まあ、王族ご用達の宿だしね」

「……お金を返すの分割払いにしてもらっていいいですか……、
ていうかもう少し宿ランク落とせませんか……？」

「だからお金は気にしないでいいって言ってるのに」

にこにこしながら王子が言うけれど、逆に信用できない。宿泊費はまたあとでこっそり調べよう。四回くらいで支払えるといいけど。利子は無視しよう。

部屋について荷物を下ろした。ようやく肩が軽くなる。

セレブなのはもういい。だけど、たかだか四人泊まるだけで、この広さはおかしい。客室があるのはいい。ダイニングとかキッチン、主寝室めいたものもある。……セレブめ……！ 六畳の部屋とかトイレの広さかよ！ 落ち着かねえよ！

「ちよつと狭いかもしれないけどごめんね？」

もう黙ってくれないだろうか。

何やら相談してる一行を余所に、私は荷物の中身を確認した。

幸い生物は入っていない。この先何かあった時のための大事な食料だ。

ふと気配を感じて顔を上げると、王子が興味深そうに聞いてきた。

「何か色々入ってるね。一体何が入ってるの？」

「ここに来る前に買い物をしていたんです。食料とか日用品ですね。大量に買ったから、カバンパンパンですけど」

あまりに興味深そうなので、草原で食べていたカロリーメイトを一つあげてみた。ちなみにフルーツ味。

「これは？」

「カロリーメイトっていいまして、携帯食料です。ビスケットとかクッキーみたいな触感で美味しいですよ」

「へえ……」

「色んな味がありますよー。この一箱で一日は保ちます。必要なエネルギーとか含まれてるので、すごくお役立ちな一品です。欠点はやたらに喉が乾くくらいですね」

そう説明していると、王子は何の躊躇いもなく、ぱくつとカロリーメイトを食べてしまった。

私があげただけで、毒味とかいいのだろうか。勿論毒など入っていないが、王子なんだから気にしたらどうなんだろう。

王子はぱくぱくと一本をあつという間に食べてしまった。

「携帯食料にしては結構美味しいねえ」

「美味しいんですけど、確実に栄養は偏りますね」

後はインスタントラーメンとかガム、のど飴、缶詰め、ふりかけ、レトルトパックとか、ごちゃごちゃ入っているものを説明していると、王子はすごく楽しそうに聞いている。

「アヤの世界は文明が進んでいるんだね」

「そうですね。私の世界はすごく便利だけど、この世界にあるような色んな大切なものを無くしている気がします」

閑話：優しさとナンパは紙一重・後編

「例えば？」

「山とか森みたいな大自然。町や村にある人の和。私の世界にもまだ残ってるけど、根底にある大切な何かを失っています。それがこの世界にはあると思います」

記憶に浮かぶのは、膝を抱えて泣いている自分。周りは卑怯な人間ばかりだった。

「森に辿り着くまで草原をひたすら歩いていたんですけど、大きな青空に続く光景に心が躍るなんて初めて知りました」

どんなに辛くても、世界はとても美しい。そこにあるだけで、自分を優しく静かに受けとめてくれる。

ちよつと恥ずかしいことを言ってしまった。

王子が何かすごい優しい顔で見つめてくるんですけど。

あーあーいいですよね美形は。ちよつと優しい顔するだけでも絵になるんだから！

目をそらして顔を背けたら、何故だか頭を撫でられた。

「アヤはいい子だね」

「は？　っていか子どもじゃないんだから止めて下さい」

なでなでしてくる王子の手を振り払うと、じつとりとヒーリアさんとシシリアさんの視線を浴びた。私が悪いんかいっ。

「殿下、隣室に夕食のご用意ができました」
「分かった。じゃあ行こうか」

王子はソファーから立ち上がり、隣に座っていた私に手を差し伸べた。

一瞬手を取るか悩んでしまう。拒否するのもおかしいので、私は右手をその手に乗せた。

にこりと笑う王子。そしてそれに鳥肌が立つ私。そんな私と王子を見守る？ 部下二人。なんとなく複雑だ。

とにもかくにも美味しくご飯を頂き（超豪華）、あてがわれた客室に戻るうとした時だった。

「ちょっとお茶でもしない？」

「……えーと」

「ここのお茶菓子美味しいよ？」

「……それじゃあちよつとだけ……」

お茶菓子に負けた気はするが、ヒーリアさんが入れてくれたお茶を飲んで一息吐いた。騎士つばいのに、やけに茶器を扱う姿がしくりくる。沈黙が流れたけど、そんなに苦にならないのが不思議だった。

まったりとした空気が流れて、私がお茶を飲み干した時だった。

「後数日で城下町に入る。その後城に入って生活するとなると、アヤがこれまで生活してきた世界の環境とは全くと言うほど変わる

と思う。きっとアヤの持ち合わせている常識や価値観は当てはまらない。城では用心してほしい。全てを疑えとは言わないが、基本的に私たち三人以外を信用しないでくれ」

思わず王子の顔を見ると、ふつと苦笑した。

「今はちよつと微妙な時期だね」

「……そんな時期に見も知らぬ私を城に入れ、面倒を見てくれるんですか？」

「これでも人を見る目はあるつもりだよ。アヤは大丈夫」

「……楽道家ですね……」

そう言った瞬間、ヒーリアさんたちに少し睨まれた。だってそうでしょ？　王子なのに全くの赤の他人をすぐに信用して城に入れるんだから。

そして王子は、ドアの側にいた私に近寄ると、突然私の頬を両手で包み、両目を真直ぐに見つめてきた。

「……大丈夫。信じて。私はアヤを一人にしない」

王子はその大きな手で私の頬を包んで、優しく笑いかけた。顔にかつと血が昇る。赤くなつたのが自分でも分かった。

「……！　そ、そんなの分かりませんよ！　大体一人にしないなんてセリフ、恋人にでも言えば！？」

私は王子の手を顔から振り払って、客室に駆け込み鍵をかけた。

ドアを背にしてずるずると座り込み、今さっきまで王子の手があ

った頬に自分の手をあてる。

熱い頬は私が真っ赤な顔であることを思い知らせた。

「ナンパ王子め……！ 歩く凶器かつての……！」

ああ、明日からがまた思いやられる。私の心を見透かしたようなナンパ王子を相手にしなければならんだから。

頭を振って立ち上がり、もう今日は寝ることにした。明日のことは明日考えよう。

それにしても。

王子ってやつは油断ならない生き物だ。

君の名は * 1 (前書き)

た、大変お久しぶりです。

君の名は * 1

異世界ガーディアナ王国。

そこが現在の綾の生活して行く地となる。

なんとか衣食住を確保し、仕事も見つけて路頭に迷わずにすんだ。

案内された客室は、元の世界で自分が住んでいた部屋の軽く五倍程の広さがある。

動揺する綾に、

「ちよつと狭いけど我慢してね」

と、すまなさそうにするヒーリアに、綾は開いた口が塞がらなかった。

「まあ、とにかく不審な行動や余計な言動はくれぐれも慎んでもらいたい。その言動によっては、君の行動を制限することになる。いいね？」

少し冷たい感じのする眼差しで、ヒーリアは綾を真正面から見据えた。

「今後の仕事に関しては、また後日説明させてもらうよ。食事は部屋に運ばせる。手洗いと風呂は侍女に案内させる。今日は疲れただろうから、ゆっくり休むといい」

何だかんだと牽制してくる割りにはやけに世話を焼いてくれる彼

は、基本的に良い人なのだと綾は思った。

「有り難うございます。本当に助かります」

頭を下げる綾に、ヒーリアは器用に片眉を上げて少し笑った。

「これでも悪いと思っているんだ。何の罪もない君に矢を放ち傷つけたんだから。そんな相手に礼を言うのだな、君は」

綾は首を傾げ、

「そのことについては十分謝罪を頂きましたし、これから暫らくお世話になるんですから。お礼を言うのは当たり前ですよ」

「君にとっての常識は、この王宮では全く通用しない。甘い考えはよしたほうがいい。この貴族社会は、目を背けるほどに醜悪で欺瞞に満ちていて汚れている。……君の美德が損なわれないよう願うでは、また。失礼する」

音もなく扉を開閉してヒーリアは出ていった。

セレブな世界にも色々あるんだな、大変だな関わりたくないよな、綾はどこか他人事のように思っていたが、後に嫌と言うほど思い知らされることになる。

君の名は * 2

「ジャンダール・アガート！ あんたは十八歳にもなつて弱い者イジメをするのか！ いい加減にその捻くれ曲がつた根性を叩き直せ！」

綾が投げつけたスリッパが逃げる男の後頭部を激打した。

「……ア……アヤ、物凄い音がしたんだけど……」
肩をそびやかした綾の隣に立つ線の細い男が、綾とすつ転んだ男をおろおろと見やった。

「素晴らしい音したわよね。さぞかし頭の中が空っぽなんでしょうよ。まったく、ナリはでかいくせに、中身は小さいわよね。どうせ」

「わー！！ わー！！ わー！！」

「も小さいに決まってるわよ。ってかレジイうるさい」

「アヤ！！ 女の子なのにそんな下品な言葉使っちゃ駄目だよ！

！ お嫁さんに行けなくなっちゃうー！！」

「レジイは女の子に夢見すぎ。みんなこれぐらい思ってるわよ。

心の中で馬鹿な男を罵詈雑言」

「いやいやいや。アヤはもうちよつと恥じらいを持とうよ……。

恥じらいというかデリカシーというか」

「そんなのあってもお腹一杯にならないし」

「そういう問題じゃないよ！」

「そういう問題だけど」

「うるせえてめえら！ 人の頭の上で漫才やってんじゃねえよ！」

後頭部にスリッパが激打し、バランスを崩して見事にすっ転んだ男——ジャンダールが叫んだ。

「……すっ転んだ奴にそんなこと言われてもね。……かつこ悪……」

綾に失笑され、浅黒い肌を真っ赤にしてジャンダールは押し黙った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0701/>

Brilliant World

2011年11月15日06時39分発行